

第6回山形県総合教育会議議事録

- 1 場 所 山形県庁舎 1001 会議室
- 2 日 時 平成 29 年 10 月 30 日 (月)
- 3 出席者
知 事 吉村 美栄子
山形県教育委員会
教育長 廣瀬 渉
委 員 涌井 朋子
委 員 武田 靖子
委 員 片桐 晃子
委 員 山川 孝
委 員 森岡 雄一
- 4 協議事項
確かな学力の育成について
- 5 議事の経過

司会：教育庁総務課副主幹

開 会

ただ今から、第6回山形県総合教育会議を開会いたします。
開会に当たりまして、吉村知事よりご挨拶をいただきます。

吉村知事

教育委員の皆様、こんにちは。本日はたいへんお忙しい中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

ご案内のとおり、今回のテーマですけれども「確かな学力の育成について」といたしました。昨年10月に開催しました「第4回山形県総合教育会議」でも、学力向上の一つの課題であります「家庭教育の充実」について協議を行ったところでございます。

子どもたちの学力向上を図るためには、学校の勉強だけではなく、家庭における学習習慣や生活習慣をしっかりと身に付けさせることが重要であるとの方向性を共有したところであります。

そのような中、今年8月に公表されました「全国学力・学習状況調査」の結果は、全国平均との差がこれまでにないほど拡大をいたしました。また、全国平均を上回った国語の基本問題におきましても、全国平均との差はほとんどないということで、たいへん深刻な状況であると受け止めております。

県と市町村の教育委員会、学校、児童・生徒、そして保護者など、教育に関わる者全員が、この危機感を共有して、関係者が一丸となって今後の

対応について真剣に考える必要があると思います。

山形県の将来を担う子どもたちの学力が確かなものとなるよう、これまでの取組みとして何が足りなかったのかなど、しっかりと分析をして学力向上の取組みを進めていかなければならないと考えておりますので、「全国学力・学習状況調査」の結果なども踏まえながら、教育委員の皆様と今後の方向性について忌憚のない意見交換を行いたいと思っております。

限られた時間ではございますけれども、本日の会議が実り多いものとなりますことをご期待申し上げ、あいさついたします。どうぞよろしくお願いいたします。

協 議

それでは早速協議に入りたいと思います。

なお、本日の会議は、14時30分までを予定としております。御協力をお願い申し上げます。

ここからの座長は、吉村知事にお願いしたいと存じます。

吉村知事、よろしくお願いいたします。

吉村知事

それでは、暫時の間座長を務めさせていただきますので、御協力よろしくをお願いいたします。

まずはじめに、資料について事務局から説明をお願いします。

義務教育課長

お手元の資料、「確かな学力の育成について」をご覧ください。

先に公表されました「全国学力調査」の結果を、折れ線グラフでお示しております。

左側が小学6年生、右側が中学3年生の全国平均との差をグラフ化したものでございます。赤・黄色の暖色系の線が国語、青・紫色の寒色系の線が算数・数学の結果を示しています。

毎年の上下動があるものの、この10年低下傾向にあり、中学3年生はその傾向が顕著でございます。特に算数・数学については全国平均との差がこれまでにないほど拡大し、たいへん深刻な状況にあると受け止めております。

資料の1枚目の下半分に、実際の問題を記載しております。小学校の算数においては、小学4年生で学習する「小数」と「整数」の足し算や掛け算の計算問題などが課題となっております。

具体的に申し上げますと、「 $10.3 + 4$ 」の計算を「 10.7 」と答えたり、「 $6 + 0.5 \times 2$ 」の計算で「 7 」と答えるべきところを「 13 」と答えたり、「 22 」または「 2.2 」と答えたりする児童が全国と比較して多くおりました。

(注:「 $6 + 0.5$ 」を誤って 11 または 1.1 と計算し、更に「 $\times 2$ 」として 22 または 2.2 と誤る)

位を正しく揃えて計算することや「足し算」「引き算」よりも「掛け算」や「割り算」を先に計算しなければならないという基本的な事項がしっかりと身に付いていない児童がいる、と捉えております。

また、中学校の数学、右側の問題になりますが、中学校1年生で学習する、扇形の「弧」の長さを求める問題などが全国と比較して大きく正答率を下回って、無回答率も高く、問題に取り組めていない状況があることが分かりました。

扇形の「弧」の長さを求めるには、円周と中心角の関係で求めればよいということを理解できていない生徒が多いことが原因と考えられますが、基本的な数学用語である「弧」とは何かを理解できていない生徒もいるのではないかと捉えております。

次に、資料の2枚目をご覧ください。

「全国学習状況調査」の結果から、家庭学習の状況について申し上げます。

全国的な傾向として、家庭学習の時間が長い児童・生徒の方が正答率が高くなっていますが、本県では、2時間以上取り組んでいる児童・生徒数が少なくなっています。

一方で、2時間以上テレビを視聴する児童・生徒が多い傾向がございます。これらの調査結果の分析から、基礎・基本の定着に課題がある、そのつまずきが一部解消されないままであることが明らかになりました。

また、重要な取り組みとして進めてまいりました「アクションプラン」が、児童・生徒のつまずきに対して、必ずしも十分でなかったと分析をしております。

現在、県教育委員会が「アクションプラン」の様式をお示しし、市町村教育委員会や学校と意見交換をしながら認識や危機感を共有し、一体となって取り組んでおります。

家庭学習の充実については、家庭との連携・協力がなくてはならないものであり、「ノーゲームデー」など具体的な取り組みを通して、望ましい生活リズムの確立や家庭学習時間の確保につなげられるよう取り組んでまいります。

最後に、資料の3枚目をご覧ください。

「確かな学力の育成」につきましては、これまで3つの重点のもと、取り組んでまいりました。

1つ目といたしましては「探究型学習の研究・実践、改善、普及・促進」でございます。探究型学習推進協力校として小学校9校、中学校9校を指定し、子どもが主体的で協働的に学ぶ授業づくりについて努めてまいりました。

また、推進協力校における授業実践や公開授業研を通して、その成果を

県内に広く普及を図ってまいりました。

2つ目としましては、「教員の指導力向上、「探究型学習」を推進する中核となる人材の育成」です。

教員一人ひとりの指導力の向上を図り、探究型学習を推進する中核となる人材を育成するため、教育マイスター制度を行ってまいりました。

3つ目としましては、「各学校における組織的なマネジメント力の強化」です。全小中学校の各校長・教頭等を対象に、カリキュラムマネジメントの考え方や、具体的な実践事例を基にした学校組織マネジメント研修を実施してまいりました。

今後はこれらに加え、ただいま申し上げました「全国学力・学習状況調査」を活かした取組み、家庭・地域との連携による日常的な取組みについて、市町村教育委員会と危機感を共有しながら重点的に進めてまいりたいと考えております。

資料の説明は以上でございます。よろしくお願ひいたします。

吉村知事

ただ今事務局から説明ありましたが、御質問があれば、後ほど、御発言の中でお願いしたいと思います。

それでは、「確かな学力の育成」について、協議をしてまいりたいと思います。

まずは、8月に文部科学省が公表した「全国学力・学習状況調査」の結果をお聞きになって、教育委員としてどのように受け止められたのか、率直なご感想やご意見、課題など、お考えをお聞かせいただきたいと存じます。

はじめに涌井委員からお願いします。

涌井委員

それでは、私から意見を述べさせていただきます。

まず、今回の「全国学力・学習状況調査」の結果についての感想ですが、県の主導のもと、現場で先生方が懸命にがんばっておられる姿を日々目にしており、学年による多少の揺れがあるにしても、今回は全体的に伸びてきていることを内心期待しておりましたので、教育委員として、そして一保護者としても非常にショックでございました。

ただ、学力テストの結果は、日本国内の相対評価・順位を重視している風潮がありますが、今ほどの都道府県でも正答率を上げて全国の成績上位地を望んで取り組まれていることは同じでありますので、その中で順位を上げるというのは、本当に、そう簡単なことではないのだな、ということをお聞き改めて強く感じたところです。

私としましては、子どもを持つ親として学力向上の観点から「家庭学習と家庭生活」について少し意見を述べたいと思います。

これまで言われてきたテレビの視聴時間やスマートフォン・ゲームなどの使用時間が他県より長い、家庭学習の平均時間が短い、また、算数・数学に対しての苦手意識などの課題に加え、今回、予習に対する認識や外国への関心度など、新たに課題と分析された項目を見てみますと、改めて子どもたちと保護者の家庭での過ごし方や社会との関わり方が問われてきているのではないかと、学習状況調査の結果を拝見させていただいて感じました。

これらの課題の中ですぐに取り組めることとして、毎日の家庭学習の充実ではないかと考えております。学校側としては学年に応じた課題・宿題を与えるということは既に行われていることとは思いますが、自分の子どもを見ていると、さらにそこから1歩踏み込んで、学力向上のためには個々の実力に応じた質や家庭学習時間に見合った量を与えるというような取り組みも今後必要である。宿題や課題の与え方を根本的に見直す必要があるのではないかと感じています。

また、今回新たに、予習に対する認識の低さが問題視されてきた、ということを受けて、例えば、次の日の授業で学習する部分の教科書を読んでくる、というような簡単なものから始めて、予習に値するような課題を与えるというような宿題の出し方もしていきながら、予習に対する意識を小学生も中学生も高めていく必要があるのではないかと感じています。

特に中学生におきましては、学習状況調査結果を見ますと、予習に取り組んでいる生徒が中学生としては少ないのではないかと思いますので、予習・復習の捉え方を含めての学校側と児童・生徒の認識をここでいったんきちんとリセットして、個々に実力が付くような予習・復習のやり方というものを新たに一からきちんと考え直す必要があるのではないかと思います。

それらを受けて、家庭の方では、テレビやスマートフォンの時間に対するルールづくりというものを徹底させていくことが重要になっていくと思われれます。スマートフォンやSNSの使用時間と学習に関して、前回の総合教育会議でもお話したところですが、東北大学加齢医学研究所と仙台市が7年間にわたって調査した研究結果によりますと、1日の家庭学習時間が十分な児童・生徒でも、スマートフォンやSNSの使用時間が長時間にわたる児童・生徒の場合、せっかく取り組んだはずの学習内容が脳に定着しないという事実が科学的に明らかになっています。その危険性を親だけでなく子どもたちにもしっかりと認識してもらって、テレビやゲーム、スマートフォンと上手に付き合っていく方法を子どもたち自身が主体的に考えていけるような環境を整えてあげることが重要であると思えます。

また、三世代同居が多い山形県では、親や子どもたちだけでなく、祖父母の方々に対する啓発も重要であると考えます。家庭学習時間の確保においては、方法論以上に子どもに関わる人々だけでなく社会全体の意識を高めていく、ということが重要であると思っております。

また、今回の学力テストにおいて気になったのは、国語の成績が以前より思わしくない、という点です。山形県の子どもたちは、全国と比較して読書好きである、という調査結果は今回も変わりませんでした。国語力が低下してきた場合に懸念されるのは、国語はもちろん算数・数学においても、問題文の意味を把握できず、さらなる学力の低下を招くおそれがあることだと思えます。

私は、今までの自分の経験として、国語力は本さえ読んでいれば自然に備わるものだと考えておりましたが、この結果を見ると、どうもそうではないのかな、と、思わざるを得ません。活字文化を取り巻く環境は昔と違って激変してきており、電子書籍をはじめとした様々な媒体を介して、より読み手に迎合した、いわば読み手主体の売れる書籍が世の中に溢れ出てきているのではないかと感じています。

国語力を高めるための読書は、量とともに質も問われてくる時代になったのではないのでしょうか。読む力の育成のため、今の子どもたちには純文学やジュニア新書など、自分の興味関心以外の様々な本に出会えるような環境や仕組みづくり、働きかけも必要であると感じております。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。
続きまして、片桐委員、お願いいたします。

片桐委員

私からは、本県の「全国学力・学習状況調査」の結果について、特に算数・数学の成績が全国平均を大きく下回る結果となったわけですが、この10年間の下降というものが本当に著しく、深刻な状況であると捉えたところ です。

生徒一人ひとりに目配りをする工夫といたしましては、教員の多忙化が近頃言われるようになっておりますので、まずは先生たちが心身ともにゆとりを持つことがとても大事なのではないかと感じています。9月に、最上地域の中学校の校長先生方のお話を聞く機会がありました。先生たちは口々に教員の多忙化について語っておられ、より一層きめ細かな生徒に対する指導をするためには、もっと教科の指導に専念できる環境を整えることがとても大事なのではないかと感じてきた次第です。

教員だけではとても補えないということであれば、小学生であれば、例えば放課後の居場所、学童保育や放課後児童クラブというような施設がありますので、また、休日の過ごし方などを考えたときに、学校現場のみならず地域や福祉部局など、様々な方々を巻き込んで子どもに関わることがとても大事なのではないかと感じています。

特に、生活習慣に問題のある家庭への支援といたしましては、下校してからの過ごし方にも注視していく必要があると思えます。経済的に余裕が無い家庭の子どもが、貧困が故に進学を諦めたり、また、なりたい職業に就けないといったことは、絶対に避けなければならないことだと思いま

す。貧困であるから成績が振るわないということでは決してなく、そこは履き違えないようにしなければなりません。凄く頑張っている子どもたちもたくさんいるし、ひとり親家庭であっても、成績を向上させるために一生懸命がんばって成績上位にある子どもたちもたくさんいるので、そこは履き違えてはならないと思っていますところです。

また、先生の話が出ておりますが、山形県はここ数年後、大量の教員の退職が予定されているとお聞きしています。ベテランの先生が抜けるということで学校現場に支障をきたすことが無いように、スムーズに若い先生に移行する工夫を徐々に進める必要があると思われま。そして県全体でこの学力テストの捉え方、危機感の共有ということでは、各教育事務所単位で受け止め方に温度差があってはならないので、今後、どのように取り組んでいけば良いのか、県全体で学力向上のための協議をしていく必要があると考えております。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

それでは、森岡委員お願いします。

森岡委員

第6次山形県教育振興計画（6教振）では、「主要施策」の「7」に「個々の能力を最大限に伸ばすための環境整備」に「確かな学力の育成」を掲げております。

この中では、目標として「全国学力・学習状況調査での正答率が全国平均以上の科目数を、平成26年の8科目の中で6科目という実績であったものを全科目にする。」という目標を掲げております。また、「国語算数が好きな児童生徒の割合を増加させる。」「授業内容が分かる児童生徒の割合を増加させる。」という目標を掲げておりますので、この目標に対して今回の調査結果が、冒頭の知事のあいさつにありましたように、全国平均との差がこれまでにないほど拡大し「たいへん深刻な状況になっている」ということは、私もそのとおりであると受け止めております。

やはり、定めた目標に対してまだ途半ばというところではありますけれども、県の教育関係者が目標達成を測るための施策に対して本来の組織的なPDCAが回っていなかったのではないかと、ということに対して私は危機感を持っているところです。

涌井委員の話にもありましたように、しかしながらではあります、文科省の調査の目的というものは、義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、教育施策の成果と課題を検証して教育指導の充実や学習状況の改善に役立つ調査でありまして、一部報道では、「「探究型」結果に結びつかず」などと、全国の順位だけを過激に捉えて表面的な数字で全体評価のように捉えた報道があったりするわけですが、拙速な判断であったり一喜一憂すべきではなく、ここは組織的に意思疎通を図って山形県の目標とした施策目標に沿って丁寧に確実に実施することで、これから目標に

向かってラストスパートが非常に大事になってくると思います。着実に結果に結び付くようにP D C Aを実践していかなければならないのではないかと考えています。

もし、他県と数字で比較・評価する場合は、もう少し本質的なところ、例えば他県・市町村の関係する組織の予算配分、それから人員配置、中・長期的な取組みの実態、そして、そもそも目標としているレベル等についてもしっかり検証を行ったうえで議論のテーブルに載せるべきではないだろうかとは見えています。

今回は基本的・基礎的なところでのつまずきの傾向が明らかになっていますので、探究型学習を支える基礎学力に課題があることが分かった、ということだと思います。今後の探究型学習の取組みと今年度の調査からの課題、これを丁寧に連動して定期的・継続的に検証をしながら、着実な学力の積み上げを期待していきたいと考えています。

最後に、今回の学力テストの発表後ですが、内部で検証していただいたあと、教育長はじめ県教委の幹部が各市町村教委や学校など19か所を直接訪問され、現場と意見交換しながら危機感の共有と探究型の山形県の課題を確認されたということで、今までには無かったような取組みではないかと思っています。この迅速な対応は県教委、各教育事務所、各市町村教育委員会、学校長や教育現場との間がピラミッド型の大きな組織になっておりますので、教育施策の遂行に不足しがちな一体感を醸成するためにもたいへん好ましいと言いますか、賞賛すべき大きな一歩ではなかったかと感じています。今後に大いに期待できるのではないかと感じているところです。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。
それでは山川委員お願いします。

山川委員

全国学力テストの結果についての感想ということですが、先ほどから各委員からお話があるように、全国平均を上回っている科目もありますが、全体として資料のグラフのとおり右下がり、すなわち低下傾向にあるということが気になります。年度ごとに多少の上下があることは当然あって然るべきだと思いますが、ここ10年の傾向として見ると、やはり低下しています。そして本日の配付資料にはありませんけれども、他方で、成績が上位にある都道府県、例えば福井県や秋田県、石川県などは、特に今年度だけでなくずっと上位で推移しています。そして、下位にある都道府県はやはり下位に低迷している状況にあります。そして山形県の今の状況を見ると、このままでは下降線を辿って行って、そして最終的にどこかのタイミングで収まるとしても下位に低迷して、そこで落ち着くということになるのではないかという危機感を私は非常に持っております。

これは、やはり何か問題があるのではないかと考えています。今までの

やり方に不十分なところがあるからではないか、そこを改善すれば一定の方向でまた上昇していくこともあり得るのではないかと考えています。

そこでいろいろ考えてみたのですが、なかなか何が問題で何をどうすれば良いのか簡単に出てくるようなことではないのですが、これは私の個人的な感想かもしれませんが、この全国学力テストというものをどういうふうに位置付けているのか、それを明確にすることが必要だと思っています。

全国学力テストは何のためにやるのか、ということについては先ほど他の委員からも説明ありましたとおり、学習指導の改善と学習状況の充実に活用する、ということであります。では、毎年1回行われているこの全国学力テストの問題は、それに足るような中身で出題されているのか、ということになるわけですが、私も全部見たわけではないですけれども、ここ何年かのものを見ると、非常に研究されて良く作られている、との印象を実は持っています。全国学力テスト実施のすぐ後に「解説資料」というものも公開されているところであり、これを見ると、相当にいろいろな方向から検討をして作ってあるということと、この問題に関しては何を、児童生徒にどういうことを要求しているのか、と、その後の勉強のやり方など、これは本当に国が作ったのかと思うくらいに内容が良くて、実はインターネットで見たのですが、解説書はかなり厚くできています。ということは、この全国学力テストは年に1回しか行われておりませんが、いわゆる学習の題材として極めて優れている、というのが私の印象です。

そして、優れているのであれば、もっと活用すべきではないか、と思っています。全国学力テストは小学校5年生修了時点のものを6年生の4月に、そして中学3年生の4月に中学校2年生修了時点までで備えておくべき知識や応用力を見るということですから、そこまでの段階でそうした能力を達成しておくべき、という指針を国が示していると思っています。

そのような意味で全国学力テストは年に1回、単に行われているに過ぎない試験だというものではなく、勉強の今後の方向なり、個々人にとって見ればその子のその時の学習状況、それからどこまで備えておくべきかといったことを全部示しているということなので、私はこれを積極的に授業の中に取り込んで活用していく、そして市町村教育委員会なり教育現場・保護者らと、改めて、全国学力調査とはこういうものである、という認識を持って取り組むことが必要ではないかと思っています。

先ほど申し上げた成績の良い県では、どういうことを行っているのかまで正確には私も知りません。いろいろとテスト対策をしているのではないかと、いろいろな意見が出ていることも知っておりますが、根本的には、全国学力テストというものに対する見方や評価、活用の仕方・程度、そうしたものをかなり機能的にスタンスとして違いがあるのではないかと、という印象です。

今後は積極的に活用していくというスタンスを明確にして取り組んでも良いのではないかと思います。

また、学力テストの結果が芳しくない状況について、これまで山形県が実践してきた学力向上のための重要な施策というものがあるわけですが、資料の3ページに「継続的に取り組む重点施策」として、これまでの施策に新しい施策を若干加えたものになると思いますが、これは本来の確かな学力の育成にとって極めて重要な施策であると思っています。ただし、全国学力テストが毎年1回報道されるとき、山形県は毎年低下しているなどと報道されて、教育現場の中にいわゆる自信喪失感をもたらしたりしていないかという懸念があります。せっかく良いことをやっていて将来に向けて長年かけてやっというときに、この全国学力テストの結果が芳しくないということで、みんな、先生方も教育委員会もそれから場合によっては保護者も含めて、どうもいろいろやっというけど今ひとつ成果があがらない、ということになってしまっているとしたら、それは非常によろしくないことだと思います。ですので、こういう施策を効果的により良く実践するためには、やはり学力テストの結果を何が何でも引き上げなければならぬのではないかと、個人的に思っています。

ここまでの感想です。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

それでは、武田委員、お願いいたします。

武田委員

今回の学力テストの結果を受けて、私自身も教育委員として3年目になりますが、毎回下降傾向ということで、どこで歯止めが掛かるのであろうと、そしてそのためには現場で何が行われているのだろう、意識はどうなんだろうと考えながらここ3年間、推移を見てきたわけですがけれども、一番はその危機感というものを、どれだけのレベルで感じているのか、ということあたりがまだまだなのかなと思っています。今回の結果を受けて、これはもうあとが無いのではないかと、というくらいに私は思っています。

まずは学力というものに対して、ただの偏差値アップが一番の目的ということではなくて、これから必要な「確かな学力」とは何なのか、知識がベースになりますが、思考力・判断力・表現力、そして一つの正解ではなくてこれからは0から1を生む力であったり、最適解や納得解をいかに生み出せるかという力が必要になる。そしてそれがこれからの世の中、子どもたちの将来の可能性を広げるために必要な学力、というものを測るものがこの学力テストであって、ただの頭の良さだけを測るものは決してない、ということをお県の皆さんにも関心を持って見ていただきたい、と思っております。

生活習慣や家庭学習などは、クラスや学年単位での家庭学習指導はありますが、もっと県全体で気運を高めることが必要ではないかと思っています。前にも申し上げましたけれども、秋田県の場合、家庭においても学校に対する意識が高かったり、各家庭に杉っ子「十か条」という、どんな生

活を送るかや勉強することが大事だということかたちのものが貼ってあり、目に見える形で県民の意識を上げているということがあります。では、山形県では例えばどんな生徒・何を求めるのかということのものが、県民全体が言える文言というものがあるのかどうか、ということになると、それは「六教振」ではない気がします。もっと分かりやすくこれを目指そう、というものが必要なのではないか。危機感から一転してまずはやるぞ、というムードづくりというものが大事なのではないかと考えております。

今回の「学力・学習状況調査」を拝見し、私は特に秋田県についていろいろ調べてみたのですが、秋田県に学べるものとしては、児童・生徒自身の主体性・能動的な取組み発表能力、例えば「算数が好き」であるとか、「算数がよく分かる」「あきらめずに考える力」「ノートの工夫」「学力テストを最後まで解こうと努力した」というポイントが非常に高いので、やっぱり「学ぶ姿勢」というものが育っていて意欲が違う。そこに学ぶ喜びや楽しさを感じるということで、学力テスト結果の順位が高いというのは頭が良いということだけではなく、「確かな学力」に繋がるものが育っていると改めて思った次第です。

また、学校の先生方に行われた「学習状況調査」の結果も細かく見てみました。「教育課程の全体計画・年間指導計画作成において機能活用に重点的に取り組んだか、横断的視点で取り組んだか」等々、取り組みに対しては、山形県は上位の県と20%近く取組みの差があり、学校現場の先生の意識もだいぶ違うというふうに感じました。指導経過について「良くしている」との回答が大体1位から3位の県までは94%から99%台ということで、徹底してやろうという施策を練って、それに対して一人ひとりの先生方が取り組んでいる姿が現れているのではないかと感じたところです。一方、山形県では74%から84%ということで、やっている先生はやっていると思うのですけれども、意識にばらつきがあるのではないかと感じました。

学習指導要領の進捗状況を測って分析・改善を通して、教育現場・日々の指導に反映させることが大事であるとされています。しかし教員の中には、自信がないままそのままになっていたり、課題が見えなかったり、指導計画が十分に練られていないまま生徒指導を行っているということで、それでは意欲も生まれえないのではないかと思います。ということで、何が良いのか悪いのか目標にすべきなのかということで、もっと外を見て比較をして、今、自分は何をすべきかということ一人ひとりの先生が考えて取り組み直さなければならないのかな、と感じました。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

教育委員の皆様から、ひととおりのご意見をお伺いしました。

委員それぞれの視点から大切な、貴重なご意見を賜ったと考えております。

資料の中で、「つまずきの多かった問題」の小学校算数A問題を私も見ま

して、「 $10.3+4$ 」、これはもちろん「 14.3 」になるわけですがけれども、「 3 」のところに「 4 」を足して「 10.7 」としてみたり、また、次の「 $6+0.5\times 2$ 」も基本中の基本で、「 0.5×2 」を先に計算して「 1 」なので答えは「 7 」になるわけですがけれども、「 6 」と「 0.5 」を足してから「 2 」を掛けて「 13 」としてみたり、本当にこれは基本なんだけれども、と思いました。

山形県の子どもたちの学力がどんどん低下してきているわけではなく、また、教員の皆さんの質が低下しているわけでもなくて、本当に基礎・基本のところ、小学6年生の結果を見た限りですが、基礎・基本のドリルをきちんとやっていけばきちんと身に付くものばかりで、高尚なことを言う前に単純なところではないのかな、と、今、改めて実感いたしました。

知事同士で話題にすることがありまして、福井県の知事と何回か話をしたことがあるのですけれども、福井県では、小学生は学校から帰ったらまず勉強するのは当たり前で、復習ドリルを何回もやって終わってから遊びに行く、ということで、それが家では当たり前になっているということでした。また、秋田県では、家庭でも、家族の意識がとても高いということでもありますし、学ぶ姿勢というものも育っているなあ、と思ったところがあります。

ものすごく難しく考える、ということなのかどうか、だと思のですが、私は単純だと思ったりもいたしますが、教員の多忙化など様々な複合的な要素もあるのかな、と思っております。本当にいろいろなご意見を頂戴してありがとうございます。

それでは、皆様方のこれまでのご意見を踏まえて、これまでの発言の中で言い切れなかったこと、また、他の委員のご意見をお聞きして新たに付け加えたいことなどをお伺いし、議論を深めていければと思っております。

それでは、またお時間をいただいてご意見をお聞きしたいと思えます。涌井委員、よろしく申し上げます。

涌井委員

ただいま、知事からお話しのあった「つまずきの多かった問題」です。実は、衝撃的なことに、先日算数検定に向けて勉強していた息子が同じ間違いをしておりました。日中に勉強したものを私が夜に丸付けをし、次の日、仕事から帰宅したあとで一緒に復習をしたところ、息子は理解をしていなかったのではなく、「忘れていた」。息子にこれはこうして解くことを教えると「そうだった、忘れていた」ということで、その翌日は私が解説するまでもなく息子は理解していてすらすらと解いて正解であった様子を見ていて考えるに、「学校で振り返っている暇がないのかな」「家庭学習の中で振り返っていかなければならないのかな」と思ったところでした。

また、ある別のお子さんの話ですが、中学1年生になって国語の授業時間に作文を書く課題があったときではないかと思うのですが、カタカナが書けないという生徒がいた、ということで、よくよく考えてみると、カタカナを小学1年生で習った後、あとは一切習うことはないのでは、もしかして

てそれまで書けない単語があったとしても先生がその単語を書く場面に遭遇しない限り気付かない、ということで、例えば、スマートフォンの「フォン」の部分が書けない、といった部分的なところなのですが、そういう生徒がいるということに、少し複雑に思ったところなんです。ということで、習ったことをなかなか定着しきれていない、ということも最近思ったところなんです。

そういうことで、定着しきれていないかどうかの判断はなかなか難しいところだと思われませんが、それはさておき、私も武田委員の意見と同じで、学力を付けてどうなりたいのか、どうしたいのか、ということをしつかりと子どもも親も社会も皆で一緒になって考えて、一つの方向に向かっていかないと、なかなか難しいのかな、と、方法論ではなく何となく意識の話になってしまうのですが、今回の学習状況調査の分析結果というものを、これまでも同じ問題点を指摘されてきたと思いますけれども、その課題が未だに改善されていないということ、そして最近新たに顕著になってきた課題や問題があるということで、非常にどんどん解決が難しくなってきたな、と感じています。

学力を付ける、ということはどういうことなのかということ、これからの未来を生き抜く力を子どもたちに付けなければ、自分たちが住む地域はどうなってしまうのか、ということも本気でみんなで考えていく必要があると思います。学力は付けたほうが良い、ということをしつかり明確にして、皆で向かっていかなければならないのではないかと思います。

先日、0歳の赤ちゃんの約20%が毎日スマホをいじっているという調査結果があるという、衝撃的な記事を目にしました。いじらせている親の理由が「静かにしてもらいたいから」といった、自分本位の理由で赤ちゃんにスマホを触らせているということで、非常に衝撃を受けたところです。それを受けて、子どもを持つ前から問題意識を持ったり、子どもが小さいうちから将来の学力や子どもの未来の姿を見据えた行動をきちんととっていく、という意識付けをしていかなければならないことを感じました。

東北という地域は、様々な点で他の地域と比べて多くの課題を抱えていて、私自身東北に生まれたことをコンプレックスに思ったこともあります。今後ますます人口減少と少子高齢化のスピードが他の地域より早いと言われるこの地域において、こうした課題を解決して地域の未来を守り抜いていくためには、リーダーシップを持った人が、今までのシステムにとらわれないような仕組みや社会を作っていかなければならないと思います。既に東日本大震災の被災地では、真の起業家精神を發揮して多くの新しい事業や取組みが進められているようです。もちろん山形県内においても同じ流れが各地で起きておりますけれども、そうした流れを意識してしつかりとそこに食らいついて行って、むしろ日本の中でこうした流れを牽引していくくらいの気持ちを皆で持って、ぜひ頑張っていきたいと考えております。

私たち大人がまず意識して、そして頑張っていく姿を子どもたちに示して、そして新しい未来をこの地域で作っていくんだ、という気持ちを子どもたちの中に育てていきたいというふうに考えています。それが、子どもたちが自ら主体的に学習に取り組む気持ちを育ててくれると信じています。地方でも様々なイノベーションを活用すれば、そういったことがより現実のものとして実現できるのではないかと考えています。

ただ一方、OECDが実施しているPISAの調査（生徒の学習到達度調査）では、日本は直近の2015年で世界第4位、科学的リテラシーにおいては2位だった、ということで、世界の中でも学力の高い日本の中で平均以上・以下ということを考える視点と言いましょか、日本は世界の中では学力が高い、ということも同時に自信を持って、そうした視点で考えていっても良いのかな、とも思っています。日本の先生方は全般的に世界の先生に比べて自分の指導力に対する自己評価が低いそうですが、PISAの結果から見ても、日本の先生方は世界の先生方よりも極めて優秀であって、そういった点で山形県の先生であることにもっと自信を持っていただきたいと思えます。

今後も、現在進めている学力向上のための様々な取り組みに対して自信を持ってみんなで進めていただき、更に先ほど述べたような家庭学習などに対するの取組みの強化に家庭や地域と連携して取り組んでいただければと思います。

先日、探究型学習推進協力校の授業を拝見させていただきましたが、小学校・中学校ともに、児童・生徒の興味・関心を引き出しながら自然に子どもたちに問題意識を持たせて学習を進めることができる内容で、とても素晴らしい内容でした。また、音楽や体育などといった授業にも探究型の学習を進めていて、子どもたちが主体的に様々な学習に取り組むことのできる授業が展開されているようです。

推進の取組みはまだ始まったばかりですが、推進協力校の学力テストの今後注目、そして期待していきたいと思えます。以上です。

吉村知事

はい、ありがとうございます。

お子さんが忘れていた、ということでありました。思い出したらもう大丈夫だった、ということでもあります。家庭で1年前や2年前のことまではなかなかたいへんなのかなあ、ということ、それと先ほど山川委員のおっしゃった、学力テスト問題はよく考えられている、優れた問題なので活用していくべきではないか、との意見はフィット感があったところです。

それでは、片桐委員お願いします。

片桐委員

私は、教育委員になってから何校か学校を回らせていただき、実際に先生が授業をしているところを見せていただいています。それぞれの先生が工夫を凝らして授業をしておられるし、生徒もまたキラキラした眼をし

てすごく真剣に授業を受けているところを目の当たりにして、本当にこれで低下しているのであろうかと、ちょっと疑問に感じるような、そんな現場を見させていただいています。

日ごろの先生方のご努力に非常に敬意を表するわけですが、つい最近、酒田市に「マザーズハローワーク」というものができ、これは山形県内では2番目に出来たものということですがけれども、赤ちゃんのうちから、子どもがまだ小さいうちから働くお母さんが山形県はとても多いということで、家に帰ってからお父さんもお母さんも不在であるという子どもたちが増えていて、学童保育の利用もとても増えています。そういうことで、先ほど知事がおっしゃったとおり、家に帰ったらおじいちゃん・おばあちゃんしかいないとか、あるいは家に帰っても誰もいないので放課後児童クラブに行く、という子どもたちもいるわけなので、親だけではなくいろいろな方々を巻き込んで学習する環境、それから社会全体で子どもを見守り、そして学力も高めていこうという機運を高めていかなければならないと、日ごろ感じているところです。

そこで、これは経費が掛かることを重々承知で申し上げますけれども、室内環境の整備ということでは、山形県は、冬に対する・寒さに対する整備ということにはとてもよく取り組んでいると思いますが、近年は夏の暑さも半端でないということで、ある女子高校生が新聞の投稿欄に、テストの問題を解いていてもぼたぼたと答案に汗が滴り落ちるなかで勉強しているということを訴えていたような内容もありましたので、学校の中に、放課後「ここは涼しい場所」という勉強できる場所が1部屋でもあればとても良いのではないかと思われました。学習環境ということではハード面はそのようなことで、人的な環境ということでは、最近いじめの問題でいじめの件数が増えているという結果が出ていたわけですがけれども、これは、いじめを積極的に認知した結果であるというふうに捉えておりますので、県では一生懸命いじめ防止に取り組んでいるという状況にありますし、人的な環境ということであれば、本当に良い環境で自分の好きな勉強は楽しい、友だちと勉強するのが楽しい、学校で勉強するのが楽しい、そういう環境の中で勉強させてあげたいと切に思いますので、県全体で子どもたちを支えていけたら良いと日ごろ感じています。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。
それでは、森岡委員お願いします。

森岡委員

先ほど涌井委員から、スマホの利用に関する指摘がありました。
私のところでも、孫が自宅に遊びに来ると「おじいちゃん、i-pad」と言って私のi-padを起動しろと私のところに持ってくるので、これは私自身、ちょっと反省しなければいけないのかな、と危機感を持って伺っていたところでした。

発言の2巡目です。六教振では主要施策7に「個々の能力を最大限に伸ばすための環境整備と確かな学力の育成」とあります。今日提示していただいたアクションプランもそうですけれども、今までに実際に教育委員会として、教育現場でも、学校のマネジメント、それから教育環境の改善が一体となって取り組んでいこうといった目標、それから児童・生徒、家庭、学校での学習環境と学習カリキュラムを連動しましょう、こういった目標がありました。そのほか県では独自に学力テストというものがある、これも探究型学習の定着の検証を含めて行っているところだと思います。

私としては、こういった目標設定したものに対して、果たしてその目標を達成するぞ、という組織的な連動が本当になされていたのか、私はここが弱かったのではないかと思ったところです。山形県と各都道府県とで私は何ら大きく違うところ、不足している点はなかったのではないかと考えています。実際にこうした目標に掲げたプランが、本当に目標実現のためにPDCAが具体的に機能したのかどうか、繰り返しになりますが、危機感を感じているところです。

教育というものは、中長期的な時間を必要とすると思います。今回、県全体で危機感を共有した今こそ、本質的に長期的に多面的な視点で子どもたちの勉強への好奇心、それから好きになるきっかけ作り、そして探究する気持ちを引き出す工夫が、親、そして地域、教育関係者に求められているのではないかと考えています。

この学力テストの成績については秋田県がよく取り上げられるわけですが、私が秋田県で注目したいのは、先ほど武田委員から発言がありましたけれども、非常に秋田の教育委員会からの問い掛けが「問いを発する子どもの育成」ということで、「秋田若杉7つの育み」というテーマになっておりますが、非常に分かり易いまとめで県民に配信されています。その一つですが、一番感動したものが「早寝・早起き・朝ごはん」です。そして2番目が「元気なあいさつ」で、3番目が「読書」です。4番目が「家庭が授業の続きです」という位置づけを、明確に示しています。ご承知のとおり秋田県では、「読書」は全国トップクラスの学力の土台だ、という位置づけを早くからしておりまして、日本で唯一「読書の日」を設けています。私は、確かにテストの成績は素晴らしいと思いますが、こうした地道な毎年毎年の子どもたちに向かう丁寧な取組み、地域や家庭を巻き込んだ、当たり前のことを当たり前のようやるような活動がしっかりと、組織一体としてやられている、そうしたところがもしかして強みなのかな、というふうに見させていただいたところです。

それから私も委員会で発言させていただいていますが、片桐委員から発言がありましたので少し付け加えさせていただきますと、茨城県水戸市では、学校施設環境改善交付金というものを利用して、全小中学校にエアコンを整備することを決めています。また、図書館等の施設は完全に洋式の便水器の整備が全施設で完了する計画になっているようで、これも非常に

長期的な投資であると思います。

こういったことも含めて私たちの活動というものが、もう少し中長期的な視点で今こそ投資を図っていく、ハード・ソフトともに将来を意識して充実を図っていく時期ではないかと考えます。

また私は、さんさんプランの成果ではないかと解釈しているのですが、あまり目立たないかもしれませんが、山形県の子どもの落ち着きというのは、様々な数値を見ても全国でトップのレベルではないかと思っています。そういうことで、他県の目標となる実績もたくさんありますので、素晴らしい点をもっと丁寧に把握して情報発信をしていき、現場の先生方をしっかりと励ましながら取り組んでいく必要があるかと思っています。

今回ひとつの例として、(河北町の)河北中学校が全校朝会で「生き生きと自己表現でき、世の中のためになる人間の育成」という互いの共通した目標を掲げています。「温かい学びあいの授業」を作る、これを全校朝会で先生方が生徒に直接呼びかけています。先生方と生徒、そして生徒と生徒が互いに現状に向き合って「論理的な思考と表現」ができるよう、全校で活動しよう！という取組みがなされていて、これを私は非常に感動して見ております。山形県は「教育県やまがた」と言われていたわけですが、その王道ではないかと感じているところです。児童・生徒に懸命に向き合おうとする先生方の教育現場の熱い思い、取組みが県内全体に広がり県教育委員会として、丁寧に現場の背中を押すような活動を積み上げていけば、今、懸念されているような問題も必ず改善されて成果が見えていくのではないかと思います。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

それでは、山川委員お願いいたします。

山川委員

先ほどは、全国学力テストの問題とその関連する資料について、あれは非常に有益なものだから学習の題材として積極的に使用した方が良いのではないか、という話をさせていただきました。もちろんこれだけで確かな学力の育成になるなどと言っているわけでは全くありません。また、やり方を間違えると非常に問題になるということも分かっています。つまり、目的と手段と言いますか、逆転させるような使い方をしては良くない。そのへんのところは教育委員会も含め、その指導する立場、それから教育の現場で工夫が必要なところであろうかと思っています。

他方で、先ほども少し申し上げましたけれども、こうした学力テストの問題、それから関連資料を題材として使用することは、本来、山形県がこれまで、またはこれからも実施していく「確かな学力の育成」あるいは探究型学習といった取組みと矛盾するような考え方では全く無くて、これは並存して進めていく、そういうことで両者補いながらと言いましょか、より実践的・効果的な役割を果たし得ることになる、と私は思っております。

す。そういう意味で、少し考え方としては若干狭かったかもしれませんが、せっかくの題材をもう少しきちんと使って、ということは、これまであまりそういう意識で見てこなかったのではないかと私の印象があるものですから、そのようなことで申し上げさせていただきました。

また、森岡委員からも片桐委員からも発言がありました。夏の山形は寒暖差の激しいところで、非常に夏、暑いです。しかも朝晩の温度差、それからその一定の時期の温度差が激しいので、ハードの面なのでお金が掛かる話になりますが、できればエアコンがあれば良いと、今日のテーマとはあまり関係の無い話かもしれませんが、もしかすると学力も上がるかもしれない、という希望を持って付け加えさせていただきました。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

それでは武田委員、よろしくお願いします

武田委員

発言を聞いていて思い出したのですが、「杉っ子10か条」という、先ほどの「7か条」に代わる、山形の「家庭の日」のポスターにそんな感じのものがあつたように思います。何か条だったか、非常に良いことが書かれていたと記憶しています。ただ、残念ながら学校でそれを見たことがありません。ふと急に思い出したところですが、それを活用してはいかがかと思つた次第です。

つい先日、私はある中学校で授業に参加させて頂いたのですが、本当に担当の先生の授業は素晴らしくて、“つかみ”であるとか、生徒の発話力・発言力、眼の輝きというものがたいへん素晴らしくて、モデルになる先生なのかなあ、というふうに見ていたのですが、そのあと校長室で校長先生と私とその先生とで学力向上について少し話をしていたのですが、その先生からは学力向上についての意見はあまり出ませんでした。現場で授業改善などを一生懸命やっていると思うのですが、思つた以上に特に学力向上に対してあまり関心や興味がないのかと気になるころでした。

今回、特に中学3年生の学力がこのグラフですと10年間にわたつて下がり続けているというなかで、探究型学習もそうなのかもしれませんが、なかなかすぐに効果が出るものではないと思うのですが、現場の先生方の意識自体、例えば仕組みの積み上げであつたり授業の質というものが、やっぱり上位県と違うのではないかと、かなり気になったところでした。

上からの浸透ではなくて、学校現場からのボトムアップがどうなのかな、先ほど言つた山形県の子どもたちの学力向上のためにやらねば、という意識というものがどれくらいあるのかな、と。却つて「やらされ感」のような感じでネガティブに受け止められていないか、というところが気になるころです。

探究型学習の重要性が叫ばれて先生方の指導力向上がさらに求められて

おりますけれども、現場はさぞかしたいへんだと思います。いろいろダイナミックに変えていかなければならない状況だということですが、世の中、教員の方々だけではなく、民間の企業においても本当に変わらなければならない時代で、スピードであったり考え方であったりリノベーションであったりと、そういうことで、どれだけの意識の差あるいは情報格差が開くばかりという感じです。先生方個人も、やはり一人ひとりがその波に乗れるように今の世の中に関心を持ってそれに合うように子どもたちをどう育てるべきか、というような「大義」というか、または大局的な視点といたしますか、そういう意識というものを是非持っていたきたいと思います。

私から「重点施策」の3つ目についてお話をさせていただきたいと思うのですが、たまたま拝見した論文で、国立教育政策研究所の秩父先生とおっしゃるのでしょうか、学校文化について秋田県、福井県の向学が断トツに高いという点に注目して分析しておりました。それは、先生方の「使命責任共有」という項目です。「学校改善において責任を意識している」、「達成すべき使命を共有している」、「授業改善の必要性を理解している」、「児童・生徒の学力向上のためにはどうすれば良いかを多くの教員が理解している」ということ、さらに「公開・省察規範」という項目があるのですが、「同僚の授業を参観し意見交換が習慣化している」、「同僚からのフィードバックがある」、そして「同僚性」という項目では、「同僚と学校運営や学校経営上の課題について話をする」、「休み時間なども授業に関する話が交わされている」、「多くの教員が他の教員を自発的に支援している」といった項目がたいへん高い、ということです。

反対に、低い項目としては、「多様性」。多様性といえば通常は良い意味に捉えがちですけれどもそうではなくて、「教員間で学校目標の解釈の違いが大きい」、「職員会議で決まったことを各教員で受け止め方が異なっていることがある」という項目が低い。あと、「習慣性」として、「従来のやり方を受け継ぐことが重視されている」、「個の文章のやり方を引継ぐことが重要であると考えている」という項目が低かったということで、ポジティブな文化よりネガティブな文化が低いというような結果になっております。

学力状況調査においても、項目一つひとつに対しても丁寧に取り組んでいるという様子が先ほど99%とか100%取り組んでいると、自信を持って答えているところからも感じられます。項目に沿ってやるべき対策が講じられて学校現場にもきちんと浸透しているというところが、山形ではいったいどうなんだろうと気になりました。こうした取組み・仕組みというものは徹底してやるかやらないか、というところで、企業においては勝ち組のやり方・負け組のやり方というような言い方で比較されます。やはり勝ち組のやり方というものを分析して自分たちはどうなのか、というような認識を持つ、取り入れることも大事なのではないかと思います。

そうは言っても、先生方を大事に育て、明るいビジョンを描いて志を一

緒に持ってコミュニケーションを深めながら盛り上げてやっていくというところが大事なところなのかな、と思います。ですので、校長先生のリーダーシップというところも、先生に一任するというのではなく教育事務所であったり県も一体となってそれを支える策というものも大事かと感じた次第です。以上です。

吉村知事

ありがとうございました。

2巡目ということでお話を伺いました。様々な視点からご意見をいただき、ありがとうございました。

それでは最後に廣瀬教育長、ご発言をお願いします。

廣瀬教育長

ありがとうございました。たいへん有意義なご意見をいただきました。

「確かな学力の育成」と、そしてその前提となる基礎・基本、あるいはつまずきの改善といった部分、これは本当に並行してやっていかなければならないという思いを強くしたところです。

特にこのつまずきの改善につきましては私も相当考えてきたところではありますが、今日の話をつまみまわして大きく4つの柱で取組んでいきたいと思っています。

まず第1には「危機感の共有」であります。皆さんからも多くのご意見をいただきました。学力調査については基礎・基本の定着が不十分であるとか、算数・数学が嫌い・分からないといったことがその中で判明しているわけですが、あるいは予習・復習といった問題、学習時間の問題などもございます。こうしたことについて、まずもって県・市町村・学校現場、そして家庭・保護者の皆さんが危機感を共有して、そしてそれぞれが全体となって組織となって、連携・協働して一体的に取り組むこと、そのためにいろいろとお話をさせていただいているところでございますけれども、少しずつそうした取組みを進めていきたいと思っています。

それから具体的な方策、2つめでございますけれども、これはやはり学力・学習状況調査というものは、出題される問題、それからその学習状況調査結果、いずれも、いわゆる学習指導要領の定着状況を見る上で非常に重要なコアであることを改めて認識する必要がある。そして、その結果と分析を積極的に評価し、活用していく必要がある、ということをお大前提として考えなければならないと思っています。特に、つまずきの傾向を放置しないで、そして、しっかりとそれを改善していく、そのために県教育委員会では「つまずき問題集」を作成いたしました。今のところこれは「算数・数学」だけですけれども、国語も欲しいという声があります。こういったものを積極的に活用して、その結果を検証することが必要だと思っています。そのために県教委では「アクションプラン」の様式を改定いたしまして、そういったことが取り組めるように、あるいは検証できるように、

ということで、各学校で各教育委員会と話をし、そして各学校でそうした取組みが行われるように進めているところです。既にやっているところもございます。

3つ目ですが、これは学校の先生方の指導力を一層高めるということで今取り組んでいるマイスター制度、そして福井県や秋田県など他県にも勉強に行っておりますので、その成果をしっかりと波及してもらおうということも基本になるわけでございますけれども、また、働きやすい環境づくりにも一生懸命取り組んでいるところでありますが、一方で全国学力学習状況調査の学校質問紙の中で、先生方の教え方について、自らの分析ですけれども、先ほど委員からもあったように、この「指導計画」、知識技能の「活用」に重点をおいた指導計画とか、あるいは教科横断・教科の関連が分かるような過程の編集などなど、子どもたちが学ぶ意欲であるとか学ぶ必要性を持って主体的に協働的に学ぶ、そういった取組みが不十分である、と、先生方が自ら書いておられるわけですが、そういったことに関して学校で意識して取組みをしっかりとしていかなければならないが、そのためには校長先生がリーダーとなって「カリキュラムマネジメント」というもの、新しい学習指導要領の中心命題になっているわけですが、これもしっかりと実践して、そしてこのつまずきなどの結果について授業改善を進めていく。これは学校側からのアプローチということで、3番目に必要であると思っています。

4番目は「家庭」であります。家庭における生活習慣や生活リズムの確立、そして主体的な学習ができるように、ということでの予習、それから先ほど話があったように、基礎知識の定着を進めるための復習、これを中心とした家庭学習、そのためには一定の学習時間も必要ですので、家庭学習時間の確保、そのためにはまた先ほどから話があったようにテレビ、スマホ、そしてゲームについてのルール作りといったものを家庭・保護者の皆さんと意識を共有していく。当たり前のことを当たり前のように、と話がありましたけれども、まさにそういった意識を持ってもらって、そして学校と連携して家庭学習を進めてもらう。県単位でこういった意識の醸成を図る、というお話もありましたし、まさにそのとおりだと思います。「教育の日」に作った山形県の7か条もあります。それも十分活用されていないということで、これも活用していかなければならないと思います。

こうしたことを合わせてこういった施策について、一方で長期的多面的視点も必要だと思います。そういった視点に立ちながら評価検証改善のためしっかりとPDCAを回して行って学力向上を図っていききたい、しっかりと取り組んでいききたいと思っています。

吉村知事

はい、ありがとうございました。

本日は、教育委員の皆様から本当に貴重なご意見をたくさんいただいたと思っております。

ここで、私からも一言だけ話をさせていただきたいと思いますけれども、小学校・中学校で行われておりますこの学力テストですが、これは目的ではないと思っています。ですが、学校は「学ぶところ」でございますので、学力も大事なこと、たいへん重要な一つだと思っております。

その中のこれも、その一つであること、というふうにしっかりと位置付けたほうが良いのではないかと思っております。学力テスト、と聞いただけで拒否反応を起こすということがあってはならないと言いますか、良い人間性を形成するという意味では、勉強と部活といった、様々な人間性を形成する要素があるわけですが、どれも大事だと思います。

最近、私の高校の同窓会総会があったのですが、昨年度の卒業生が、進学の結果もたいへん良かったし部活動の結果も良かったということでありました。どっちかが良くなるとどっちかも良くなると言いますか、案外それは私は、両方あいまって非常に良い向上心が芽生えるのではないかと思っています。

ですから、学力の中の一つだと、しっかりと位置付けてもらいたいと思っているところでありますし、小・中は市町村の教育委員会の管轄でありますので、県教育委員会でああしろこうしろとはしていないとは思いますが、一体感という言葉が出ましたけれども、その一体感をもっともっと、連帯と言いますか、やはり一体感だと思います。それが大事だと思いますし、それがひいては家庭との連帯、連携、そこがやっぱり重要だと思います。

継続的に取り組む重点施策に1, 2, 3と3つあるのですが、「家庭」という言葉は1回も出てこないのですけれども、これは学校の中の、という位置付けなのでしょうか。

廣瀬教育長

これは、どちらかというところと探究型学習を進めるための3つです。それぞれの授業の改善と教員の資質向上、そして全体的な組織マネジメント、この3つで探究型学習を進める。探究型学習を進めるということは確かな学力を進めるということですが、その前提となる基礎・基本知識についてはこれは前段であるように、つまりき解消の取り組みと家庭学習をしっかりとやらせよう、そこで今回はこの3つに加えて前のページの(3)、「学力・学習状況調査」をしっかりと活かしていく、ということと、それから家庭への日常的取り組み、この2つが後ろの3つと一緒に5本柱、ということになります。

吉村知事

分かりました。「家庭」ということもしっかり入っているということでもあります。

先ほど森岡委員からお話しがありましたが、「問いを發する子どもの育成」というのは非常にポジティブな感じで、掲げている県があるということでした。ノーゲームデーも非常に良いと思いますし、ポジティブな意味

で子どもも望ましい像みたいなものになっても良いのかなあ、と思ったところでもあります。

(学テ結果が) ずっと下がり続けてくると、子どもたち、教員、みんな県民までもが自信を失っていくようで、本当によろしくないと思います。そこをちょっと懸念するところでもあります。伸び伸びと良いところももちろんありますし、全国的にトップということではないかもしれませんが、ただやっぱり自信というものは大事なところでもありますので、本当にポジティブに県民みんなで社会的な意識醸成ということもやりながら、「一喜一憂しない」という言葉もありました。本当に何カ年計画ということでもよろしいと思いますので、しっかりと本県の子どもたちの学力向上に向けて取り組んでいただきたいと思います。

吉村知事

それでは、時間になってしまいました。

これだけはどうしても申し上げておきたい、ということがございましたら、何かございますでしょうか。よろしいですか。

それでは本日は、様々な視点から貴重なご意見をいただきまして、たいへんありがとうございました。

以上で協議を終了させていただきます。御協力たいへんありがとうございました。

閉 会

以上を持ちまして、第6回山形県総合教育会議を終了いたします。

本日は、誠にありがとうございました。